

## 韓国所蔵漢訳西学書に関する書誌的考察

### 『韓国所蔵中国漢籍総目』を手がかりに

一、はじめに

二、朝鮮王朝後期の社会と思想状況 実学と西学思潮の勃興

三、漢訳西学書に関する基本書目文献

(以下、次号)

四、『韓国所蔵中国漢籍総目』からみた漢訳西学書の書誌情報

五、朝鮮王朝後期における漢訳西学書の位置

六、むすび

李 梁

一、はじめに

本稿は、漢訳西学書の東アジアにおける成立、伝播とその影響に関する総合的研究の一環として、十七世紀前半より李氏朝鮮王朝に伝来した漢訳西学書について書誌的な考察を行うものである。ここでいう漢訳西学書とは、十六世紀末から十七世紀後半までの明末清初期<sup>1</sup>に、主としてポルトガル、スペイン、イタリアなど、いわば「南蛮」系のイエズス会宣教師によって漢訳または漢文で書かれた天主教および科学技術関係の著訳書を指している。十七世紀後半以降、すなわち、康熙二十四年(1685年)、フランスのルイ十四世から、清朝に派遣されたブーヴェ(Joach Bouvet、1656～1730、白晋)、ジョルビヨン(Joan-François Gerbillion、1654～1701、張誠)らイエズス会バリエ外国宣教会(Société des Missions Étrangères)のフランス系宣教師達の著訳活動は、別稿で改めて

検討する<sup>2</sup>。なお、明末天主教「三柱石」の一人、李之藻(1565～1630)編『天学初函』にならって、通常、漢訳西学書は、天主教教理とその神学思想を解説敷衍する「理編」、ならびにヨーロッパネサンス期以降の科学技術一般を翻訳紹介する「器編」に分類される。本稿では、「器編」を主な考察対象として、「理編」については、近い将来、別途での論究を俟つこととしたい<sup>3</sup>。

昨年(二〇〇六年)三月と八月、学会参加と漢訳西学書の収蔵状況に関する調査のため、二度にわたって渡韓し、ソウル大学校奎章閣をはじめ、高麗大学校、延世大学校、成均館大学校、韓国外国語大学校および国立中央図書館、国立博物館、慶州新羅科学博物館などで文献調査および歴史的遺構、実物の見学を行っていた。二度の調査によって、多くの文献史料の所在が確認でき、相当の手がかりが得られたと言ってよい。とくに近年、韓国の多く

の公私図書館では、収蔵図書管理保護と利用者の利便性を図るため、貴重書、重要歴史的文献史料のデジタル化、公開化が奨励されている。そのため、多くの文献史料の複写製本などの手間が省かれただけでなく、遠隔地でもインターネットを通して比較的簡単に利用できるようになったことがわかった。たとえば、李氏朝鮮王朝の基本的な史料である『朝鮮王朝実録』（『李朝実録』）は、すでに数年前から韓国国史編纂委員会によって、ウェブ上無料で公開されている。基礎的なハングルさえ習得した者であれば、王朝別の閲覧は勿論、人名・地名・書籍名などのキーワードを用いてさまざまな方法で検索できる。とくに、市販のCD-ROM版には盛り込めなかった国家儀礼の絵『五礼』、『井間譜』などの伝統楽譜や天文記録『七政算』も原文のままで盛り込まれており、学界および一般利用者を大いに裨益せしめている<sup>4</sup>。しかし、そういうものの、他方では、デジタル化のゆえにこそ、管理保護上の理由で大抵は入庫が許されず、多くの貴重書は手にとって実見することができなかったとも言える。とくに、一部の図書館では貴重書のデジタル化はあらか、マイクフィルム化すら遅れており、旧式の図書カードが公刊された図書目録でしか文献史料の同定作業を行うことができなかった。こういうこともあって、本稿では、調査研究の所見を踏まえながらも、主として最新版の『韓国所蔵中国漢籍総目』（以下『総目』と略記）を手がかりに、そして、できるだけ李氏朝鮮王朝後期の社会的、歴史的状況とつき合せて、漢訳西学書の実態を書誌的に考察してみようとする。そもそも『総目』（全六巻、全寅初主編）とは、二〇〇〇年に、韓国の出版社学古房より初版発行された漢籍目録書である。『総

目』は、A4版、各巻とものべ五百頁以上、六百頁に近い大部な目録書として、代表的な公私図書館の二十八種に及ぶ重要漢籍目録並びに七十種以上の古書目録を利用した、いわば、今現在韓国で尤も網羅的な漢籍目録書であると言つてよい。ごく少数の稀覯本、石印本以外、たいていは一九一一年以前の漢籍が主に収載されているため、『四庫全書』、『続修四庫全書』の体裁に倣って、伝統的な四部分類法が採用されている。なお、収録漢籍は、一、朝鮮に輸入された中国の書籍、二、朝鮮で翻刻された中国の書籍、三、朝鮮知識人（士人）が注釈を付け加えた中国の書籍、という三種類である。

## 二、朝鮮王朝後期の社会と思想状況―実学と西学思潮の勃興

### 2・1. 李氏朝鮮王朝の後期

一三九二年（太祖元年）七月十七日、高麗朝末期から急速に勢力を伸ばした武人李成桂（1338～1408）は、いちおう高麗朝の最高合議機関である都評議使司の決定をへた形で、恭讓王から王位の「禅讓」を受けた（在位1392～98）。翌一三九三年、明の建言に従い、朝鮮という国号が決まったが、明から誥命と印章の伝達を受けて正式に朝鮮国王となったのは、それから八年越しの一四〇一年、恵帝建文帝のときであった。太祖も、それまで、「權知高麗国事」という肩書きしかもたず、いわば仮の国王だったのである。こうして李氏朝鮮王朝は、明に事大の礼を執り、正式に明のちに清を中心とする当時の東アジアの国際秩序である宗属関係

のなかに組み込まれた。

李氏王朝の歴史舞台への登場は、単なる王氏高麗朝から李氏王朝への王朝交替だけでなく、政治支配の基本理念の変革をも意味した。いわば、行政構造などの官制においては、基本的に高麗朝のものが踏襲されたが、国家政治の基本理念においては、高麗朝の仏教尊崇から一転して崇儒排仏の政策が打ち出された。すなわち、度牒制による僧侶数の制限、諸宗派の統廃合による寺院の認定など、厳しい仏教抑制策が講じられる一方、明の国家教学の中心的役目を担う朱子学（性理学）が政治支配の基本理念として積極的に導入された。同時に、学校制度の整備を通して高度の儒学<sup>2</sup>朱子学的教養が備わる人材を育成し、「朱子家礼」に代表される儒教的規範を社会全体への浸透を図った。とりわけ、一四一八年名君の誉れ高い世宗（在位一四一八～一五〇年）が即位すると、「訓民正音」（ハングル）の創製（一四四三年）をはじめ、各種の文化事業を精力的に推進し、王道政治を標榜して朱子学を基本理念とする両班支配体制の確立を成し遂げた<sup>3</sup>。

ところで、新たに登場してきた朝鮮王朝では、対外的には、明後に清との宗属関係が結ばれ、事大主義を貫いていたというものの、毎年定期的に明、清両朝に派遣した各種の使節団 大ざっぱに言えば、明は朝天使、赴京使、清は燕行使という。称呼の相違から朝鮮の明、清への思いの違いが覗えよう をおとして、積極的に国際情報の収集、分析に努め、自国の主体性の保持にも腐心していた<sup>4</sup>。対内的には、両班支配体制や身分制度の確立、文教制度の整備をおとして、統治の安泰と社会の発展を図ったが、十五世紀の後半から、王位継承をめぐる権力闘争が士林党派の

対立を巻込んだ形で次第に激化し、つい政治を牛耳る朋党集団が血みどろの競争にあけくれ、社会全体が漸次重苦しい雰囲気覆われるようになった。そうした情勢の中、宣祖二十五年（一五九二年）と三十年（一五九七年）の二度にわたって、豊臣秀吉の侵略を受け（文祿、慶長の役<sup>5</sup>壬辰倭乱、丁酉再乱）、国土の大半が焦土化となり、社会全体が深刻な打撃を蒙った。さらに不幸にも、荒廃した国土がまだ復興みないうち、今度は仁祖四年（一六二〇年）と十四年（一六三八年）、またもや立て続けに後金軍による侵攻（丁卯胡乱、丙子胡乱）に遭い、最初抵抗して、南漢山城に数十日にわたって籠城した仁祖は、ついに力が尽きて、翌十五年一月三十日、漢江の渡し場三田渡で清の太宗に降伏した（三田渡の屈辱<sup>6</sup>）。挙げ句の果てに、朝鮮は、明に替わって、従来、夷狄視していた女真人の後金、つまり清朝に対して、「事大の礼」を執らざるをえなくなった。これを境に、李朝社会が後期に入った。

## 2・2 実学と西学思潮の勃興

思想文化の面に限って言えば、後期の李朝社会は実学と西学思潮の勃興という思想風景に彩られていたと言つてよい。

前節でふれたように、両乱後の朝鮮社会では、政治、経済、社会、思想文化など全般において激変が生じてき、実学思想は、まさにこの新しい社会局面に対応する思想体系として要請された。いわば、近世朝鮮の儒学（性理学）は、李退溪（名は滉、一五〇一～一五七〇）、李栗谷（名は珥、一五三六～一五八四）のような大儒を生み、かつ近世初期の日本社会にも多大な思想的な影響を及ぼしたが<sup>7</sup>、十七世紀に入ると、漸次、「理」と「氣」や「四端」と「七情」

といった現実離れの形而上学の空虚さ、煩瑣さに陥り、それにたいする反発から、明、清から伝わってきた利用厚生、経世致用、事実求是という趣旨の実学思潮が、新たな社会状況を支える思想体系として朝鮮士人達の心を捉えるようになった。これと前後にして、西学も漢訳西学書をとおりて朝鮮社会に伝わった。いわば、実学と西学は思想的には相互刺戟しあい、補完的關係にあったと言つてよい。恰も王学（陽明学）運動は、明末西学の隆盛のため、思想的空間が用意されたように、李朝後期社会においても、実学思潮は、西学からの刺戟に負う所が大きい一方、西学も、また実学という思想的土台があつてこそ、忽ち大ブレイクできた訳である。たとえば、朱子学と漢訳天主教説を折衷して著わした『牧民心書』、『経世遺表』、『欽欽新書』などのような経世書は、こうした思想的様相を如実に現わしているように思われる。

ちなみに、東アジア諸国の中で、明末清初期に主として葡、西、伊など南欧系イエズス会宣教師によつて齎された西洋文明との出会いが最も遅かつたのは、李氏朝鮮である。しかも、朝鮮の場合、幾つかの例外。たとえば、人質として北京滞在中の王子昭顯世子とアダム・シャル（Adam Schall von Bell, 1561～1666、湯若望）との短い交友関係、少数使節が北京在住宣教師との限られた接触、および赴京使節鄭斗源とかの高名な通事ジョアン・ロドリゲス（João Rodriguez, 1561～1634、陸若漢）。この山東登州での出会いを除き、たいていは明、清両朝に赴いた各使節団随行の官僚士人達が北京の琉璃廠をはじめ、各処で収集購入した漢訳西学書および各種の西洋器物によつてであつた。いわば、明清時代の漢訳西学書を媒介にしての、間接的な接触であつた。朝鮮西學草創

期の代表的人物、李睟光（1563～1628）は、『芝峰類説』<sup>10</sup> 卷二「地理門外国三」（図1、図2参照）において、そのあたりの消息を次のように記述している。

萬曆癸卯、余忝副提學時、赴京回還使臣李光庭、權愷以歐羅巴國輿地圖一件六幅、送于本館、蓋將得於京師者也。見其圖甚精巧、於西域特詳、以至中國地方、暨我東八道、日本六十州地理遠近大小、纖悉無遺。

万曆癸卯（一六〇三年・筆者注、以下同）、余は副提學を務める時、赴京帰朝使臣李光庭、權愷は、ヨーロッパ国の地図一式六幅を以て、本館（弘文館）に送り、そもそも（これは）京師（北京）から得たものである。見るにはその図が非常に精巧で、特に西域に詳しく、中国地方、およびわが東（国）八道、日本六十州の地理に至つて、遠近大小、遺すところなく細かく（描かれている）。

後節でもう少し詳しく触れるが、ともかく漢訳西学書とその器物の伝来によつて、京畿周辺を中心に、朝鮮士人の間に忽ち西学書を読む気風が生まれ、それがまた実学思潮と呼応しあい、李朝後期の社会を舞台に、一連の壮絶な思想運動が繰り広げられたのである。



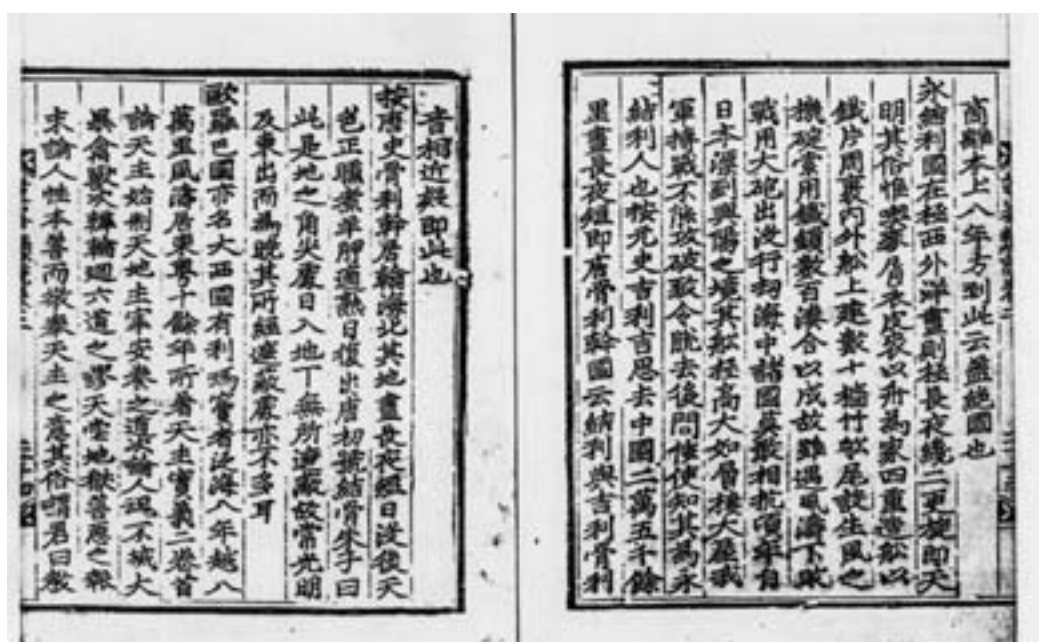


圖 1.『芝峰類說』卷 2、「地理門 外國 3」



圖 2.『芝峰類說』卷 2、「地理門 外國 3」

## 2・3・実学、西学の時期と代表的人物

李朝後期における実学と西学思潮の隆替を周到に論述するのは、むろん本稿の務めではない。況してや関係する先行研究はじつに量質とも重厚な蓄積が既存している<sup>12</sup>。従って、本稿では、次の概略的な対比図を以て、実学と西学との密接な関係性を示すことに止めておきたい。ただし、もう一度強調せねばならないのは、李朝後期の実学と西学思潮は決して孤立的に発生したものではなく、むしろ当時、東アジア諸国との間、さらに言えば、大航海時代の到来とともに、東アジアに伝わってきたルネサンス期以降の西洋文明との間にも、一種の「思想的連鎖」をもつ知的運動であり、そして、こうした往還する知的運動を可能にせしめたのは、ほかならぬ漢訳西学書が存在だった、ということである。

とりあえず、李朝後期の実学と西学の概略を示してみよう<sup>12</sup>。

図3で示されるように、時期においても代表的人物にしても、李朝後期の実学と西学の歩みは殆ど重なっていたことがわかる。事実、李朝後期社会において、熱心に西学の唱導、研究および論評を行っていたのは、殆ど実学の先駆者達である。いわば、「実学者は、西学を通じて伝統的な儒学士人の覚醒意識を促した。これと同時に、実学運動も「実利」「実証」に備わる近代的意識の実現を旨とする一種の文化運動である」とみてよい<sup>13</sup>。細かい論究は避けるが、上述の中で、李瀼、安鼎福、慎後聃を代表とする「星湖学派」、洪大容、朴趾源を代表とする「北学派」の士人達はとくに実学と西学思潮の隆盛に与って力が大きかった。かれらの西学の理解は必ずしも十全的でなく、また概して天主教に必ずしも同情的でないにもかかわらず、のである。しかし、十七世紀か

図3

西学の時期区分と代表的人物		実学の時期区分と代表的人物	
草創期、 大体1601・1750年、 代表的人物は、 李睟光、	探索期、 18世紀半ばごろ、 代表的人物は、 李瀼、 洪大容、 朴趾源（1737～1805）、	準備期 16世紀中期～17世紀中期まで（宣祖、光海君、 仁祖）、 代表的人物は韓百謙、李睟光、金埴（1580～1658） 権文海（1534～1591）	萌芽期 17世紀中期～18世紀中期まで（孝宗、顯宗、肅宗、景宗英祖） 代表的人物は柳馨遠（1622～1673）、李瀼（1681～1763）、安鼎福（1712～1791）、李重暎（1690～1752）、申景濬（1712～1781）
実践期、 正祖朝一代、 大体1777・1800年、 代表的人物は丁若鏞（茶山、1762～1836）	弾圧期、 1801年純祖朝以後、 代表人物は李圭景（五洲）、 崔漢綺（惠崗、1803～1875）、 金正喜（秋史、1786～1856）	全盛期 18世紀中期～19世紀中期まで（英祖、正祖、純祖、憲宗）、 代表的人物は、 朴趾源、朴齊家、洪大容（湛軒、1731～1783）、 丁若鏞、金正喜、李圭景、崔漢綺	

ら十八世紀にかけて、活発な思想運動として展開されていた李朝後期の西学は、朋党政治の対立を引き金に、やがて受難の時を迎えるようになった。純祖一年、西暦一八〇一年に起こった辛酉教獄<sup>14</sup>は、朝鮮の天主教史における「血にあげ血にくれた迫害の連続」<sup>15</sup>の開始を告示するような最初の事件である。悲劇的なことは、天主教（西教）に対する激しい弾圧とともに、西学も厳しい禁圧の対象とされたのである。正祖十五年（一七九五年）に発生した「辛亥珍山事件」のように、史館と弘文館所蔵の西学書も尽く焼却されてしまった。李朝後期社会において、京畿を中心に、一時非常な隆盛ぶりをみせた西学思想運動が俄に萎えてしまった。代わって、朱子学者の李恒老（1792-1886）を筆頭に、天主教と西学に反対する士人集団では、「衛正斥邪」<sup>16</sup>論を掲げ、それを官学思想の正統として再確認し、十九世紀後半の朝鮮開化運動まで固持し、朝鮮社会の近代化が遅れた一因となったと見なされている。

### 三、漢訳西学書に関する基本書目文献

#### 3・1・漢訳西学書の基本書目

李朝後期における漢訳西学書の状況を検討する場合、まず明、清時代に成立した漢訳西学書の書目を究明せねばならない。幸いに、古くから目録版本学の優れた伝統を有するお国柄もあって、明清兩朝の様々な公私目録書に漢訳西学書の書誌情報が盛り込まれている。まず、漢訳西学書関係の主な個人的書目として、『近古堂書目』、『澹生堂蔵書目』（祁承燾）、『世善堂書目』（陳第）、

『季滄葦蔵書目』（季振宜）、『趙定宇書目』（趙用賢）、『脈望館書目』（趙琦美）、『傳世樓書目』（徐乾学）、『徐氏家蔵書目』（徐渤）、『也是園蔵書目』（錢曾）、『述古堂蔵書目』、『絳雲樓書目』（錢謙益）、『千頃堂書目』（黄虞稷）および『玄賞齋書目』（董其昌）などが挙げられる。その中で、『絳雲樓書目』では、「天主教類」を初めて書目に設けた目録書として特に注目し値するであろう。鐘鳴旦（Nicolas Standaert）と杜鼎克（Ad Dudink）の研究によれば、これらの書目から確認できた漢訳西学書は、四十五冊に及んだという<sup>17</sup>。

次表は確認された書籍の一覧である。

著者	著書
利瑪竇（リッチ）	二十五言、幾何原本、勾股義、天主教實義、交友論、同文算指、利瑪竇世界世界地図、赤道南極北極圖、測量法義、乾坤體義、晴人十篇、晴人論心記法（西国記法、圓容較義、渾蓋通憲図説
艾儒略（アレニ）	幾何要法、西学凡、職方外紀
熊三拔（ウルシス）	表度説、奉西水法、簡平儀説
龐迪我（バントーハ）	七克、龐子遺説
傅汎際（フルタード）	寰有詮、天主教要
高一志（ヴァグノニ）	靈性説、（推驗）正道論
金尼閣（トリゴー）	西儒耳目資
利類思（ブツリイオ）	不得已弁
陽瑪諾（ディアス）	天問略
龍華民（ロングバーディ）	西洋地震解、地震解
鄧玉函（テレンツ）	遠西奇器図説

衛匡国（マルティニー）	天主理証
湯若望（シャルル）	西洋測食略、渾天儀説、曆学小弁／ 曆学日弁、新法曆、西洋新法曆書
南懷仁（フェルベース）	靈台儀象志
李之藻	天学初函
共著	崇禎曆書
佚名	西方超言
不明	籌算、海外與図全説、渾儀図説、測 量異同、測侯図説、附異同論、西洋 火攻図説、友論

図4

それから、清代公的目録書に冠たるものは、むしろ『四庫全書  
総目提要』（以下『提要』）を置いてほかはない。統計方法によつ  
て数字の相違がみられるが、『提要』収録の漢訳西学書は、のべ  
三十七部が確認しうるといふ<sup>18</sup>。天文曆算類の書籍については、  
簡要な内容紹介および評語がつけてあるが、宗教類書籍について  
は書目収録に止まっている。

なお、前掲李之藻『天学初函』は叢書として編纂されたもので  
あるが、目録書としての意義も無論持つていとみてよい。書目  
内容については周知のことで省くが、目録書の角度からみて、む  
しろ漢訳西学書を「理編」と「器編」に腑分けするという分類学  
的なところに意義があろう。

清末以降の関係書目としては、梁啓超「明清間耶穌会士訳著提  
要」<sup>19</sup>（『中国近三百年学術史』所収）と『西学書目表』（台湾お  
よび大陸版『飲氷室文集』とも未収）、費頼之著、馮承均訳『在  
華耶穌会会士列伝及書目』中華書局、一九九五年再版（Pfister

Louis, *Notices biographiques et bibliographiques sur les jésuites de  
l'ancienne mission de Chine, 1552-1773*, Shang-hai 1932）栄振  
華著、耿昇訳、『在華耶穌会会士列伝及書目補編』全三冊、中華  
書局、一九九五年（Joseph Dehergne, *Répertoire des Jésuites de  
Chine de 1552-1800*, Paris, 1973）、徐宗澤「明清間耶穌会士訳著  
書名表」（『明清間耶穌会士訳著提要』、中華書局、一九八九年版、  
四七三～四七八頁）、張蔭麟「明清之際西学輸入中国考略」（『清  
華學報』創刊号、一九二四年六月。ともに『中欧文化交流史論  
叢』（台北商務印書館、一九六九年）及び張雲台編『張蔭麟文集』  
（北京教育科学出版社、一九九三年）再録、錢存訓『近世西洋訳  
書对中国近代化的影響』（『明報月刊』一九八八年十月号）、尚智  
叢「格物窮理之学及相關人物著述与活動表」（『明末清初  
（1582-1687）の格物究理之学』、四川教育出版社、二〇〇三年十  
一月）、魯利（Paul Ruic）著、李天綱訳『羅馬耶穌会檔案館中的  
中文書籍和史料：目錄』、龐曉梅（Tatiana A. Pang）『俄羅斯收藏  
的北京耶穌会士作品』、李天綱「徐家匯藏書樓与明清天主教史研  
究」（以上三点とも、卓新平編『遭遇与對話 明末清初中西文化  
交流國際學術研討会文集』所収、宗教文化出版社、二〇〇三年）、  
李虎「中朝日三国西学史対照年表」（『中朝日三国西学史比較研究』、  
中央編訳局、二〇〇四年）、などの専門論著がある。

さらに、専ら漢訳西学書を扱い対象としたものではないが、参  
考価値のある専門目録書または研究論著として、以下の幾つかが  
挙げられる。例えば、モリス・クーラン著、坂出祥伸解説『パリ  
国立図書館所蔵漢籍解題目録』補遺篇、電ヶ岡出版、一九  
九三（Maurice Courant, *Catalogue des livres chinois, coréens, japonais*,



ect 3vols, 1902) 、『大英図書館所蔵和漢書目録目録』(川瀬岡崎、講談社) 、『Paul Pelliot, rev. & ed. Takata Tokio, *Inventaire Sommaire des Manuscrits et Imprimés Chinois de la Bibliothèque Vaticane*, Kyoto, 1995) ヘリオ改編、高田時雄補編『バチカン図書館所蔵中国関係文書目録要覧』、『羅馬耶蘇会檔案処蔵漢和圖書文獻目録提要』(*Chinese Books and Documents in the Jesuit Archives in Rome, A descriptive Catalogue*, Albert Chan, S.J. (陳綸緒) 、『M.E. Sharpe 2002) 、『岡本さえ「近世中国比較思想文獻」(「近世中国の比較思想 異文化との邂逅」東京大学出版会、二〇〇〇年) などは、それである。

以上の諸書目に基づき、万暦十二年、西暦一五八四年に、ルツジェリー (Michel Rugieri, 1543～1607, 羅明堅) の『天学実録』(後に『聖教実録』と改名) から、イエズス会が教皇クレモン十四世 (Clement 、『在位1769～1774) によって解散を余儀なくされた乾隆三十八年、西暦一七七三年までの、約二世紀弱の長きにわたって、前後刊行された漢訳西学書の総数はおよそ五百冊あまりに及び、著訳者が六十人以上に上るとされる。その中で、天主教教理教義に関する宗教書が五十七パーセント(約250種類)、天文、地理、数学などの科学技術書が三十パーセント(約130種類)、哲学または社会類の書籍は十パーセント弱(39種類)をそれぞれ占めている<sup>20</sup>。

### 3・2・朝鮮士人達の西学書閲読

以上の漢訳西学書の中から、いったいどれほど朝鮮に伝来されたのかは今日では精確に知ることができない。総じていえば、明

末清初期、前後二十数回にわたって各種の使節とその随員を通して、漢訳西学書ならびに西洋の器物を購入してきたことから推察すれば、およそ五十冊前後とみて妥当であろう<sup>21</sup>。それから、伝来された書籍は、まだどれほど同時代の朝鮮士人達に読まれていたのかは完全に究明することが難しい。ただし、当時の代表的な士人らの読書状況からは、およそなことが推察されよう。李元淳の研究によれば、それぞれの文集において、西学書読書状況が言及されたり西学書論評を行なったりしたのは、およそ下表の通りである<sup>22</sup>。

『天主実義』(Matteo Ricci) : 李睟光、李瀼、李献慶、安鼎福、 慎後聃、	
『交友論』(Matteo Ricci) : 李睟光、柳夢寅	
『同文算指』(Matteo Ricci) : 李頤命、	
『泰西水法』(Sabatian de Ursis) : 李瀼、	
『天問略』(Emmanuel Dias) : 李瀼、	
『乾坤体義』(Matteo Ricci) : 李瀼、	
『主制群徴』(Adam Schall) : 李瀼、	
『職方外紀』(Alemi) : 李瀼、慎後聃、李家煥、	
『七克』(Pantoja) : 李瀼、安鼎福、	
『弁学遺牘』(Matteo Ricci) : 安鼎福、	
『畸人十篇』(Matteo Ricci) : 安鼎福、	
『真道自証』(Chavagnac) : 安鼎福、	
『盛世錫義』(Mailia) : 安鼎福、	
『万物真原』(Alemi) : 安鼎福、	

『靈言蠡勺』(Sambiasi)：慎後聘、

『西学凡』(Aleni)：李家煥、

『聖年広益』(Mailia)：李榮、

『大学初函』(李之藻)：李家煥

図5. 李朝後期の士人達の西学書閱讀状況一覧

これらは、むろん完全な統計とはいえない。それにしても、読書の範囲の広さからみて、当時西学書の朝鮮伝来は広範囲にわたって行なわれ、かなり読まれていたことが想像に難くない。当時の碩学名流の書齋に西学書が儒仏書と並べられ広く読まれていたという(安鼎福『順安集』巻17、「天学考」)。丁茶山も若い頃、西学書を読むのは「一種の風潮」だと回想している(『正宗実録』巻9、「正祖二十一年六月庚寅」)<sup>23</sup>。正祖十五年(一七九五年)、「辛亥珍山事件」によって、史館と弘文館所蔵の西学書が焼かれることがなければ、今日では多少事実に近い数字が得られるだろう。しかし、その後、益々峻厳となった西教迫害につれ、西学も禁止の対象となり、漢訳西学書が伝播も閲読も厳禁されるようになった。こうして、一時一世を風靡した朝鮮の西学思潮も殆ど歴史の表舞台から姿が消えた。次節で具体的に触れるが、前記韓国での書目調査の際、李朝後期伝来の漢訳西学書は少数の科学技術書を除き、今日の残存数が驚くほど少なかったと実感したのは、そうした歴史的経緯が背後にあったわけであろう。

注、

1 明末清初期については、論者によって必ずしも共通とした厳密な時代区分があるとは限らない。たいていは明の万暦期(1573~1620)から清

の康熙期(1662~1722)前半までの、凡そ一世紀前後の時期とみてよい。たとえば、代表的な見解を列挙してみると、稽文甫『晚明思想史論』(上海世界書局、一九四四/東方出版社、一九九六年)における「晚明」とは、「大体は隆万以後より、略西暦十六世紀下半期および十七世紀上半期に相当する」、という。近年刊行の『晚明史(1573~1644)』(上下巻、樊樹志著、上海復旦大学出版社、二〇〇三年)でも、その書名が示すように、明末を万暦元年(一五七三)から崇禎十七年(一六四四)までの略七十年間の時期とする。なお、『明末清初の社会と文化』(小野和子編、京都大学人文科学研究所、一九九六年)では、「明末清初」というのは、(中略)明の嘉靖末年から清の三藩の乱の平定ころまで、西暦でいえば、十六世紀後半から十七世紀後半までの、凡そ一世紀を指している(序文)、とする。本稿では、基本的にマテオ・リッチが人明した一五八三年(明萬曆十年)からイエズス会フランス外国宣教師来清の一六八七(清康熙二十六年)年、またはフェルベースト(Ferdinand Verbiest、1623~1688、南懷仁)逝去の一六八八(康熙二十七年)年までを、明末清初期としておきたい。

2 康熙二十六年(一六八七)年、ルイ十四世から「国王の数学家」(le mathématicien du roi)として清朝に派遣されたイエズス会フランス外国宣教会の一行五人(タシャールが經由地の暹羅に留まり、来華しなかった)の中で、実は専門的な数学訓練を積んできたのは、大ルイ学院(Collège Louis le Grand)の数学教授という経歴をもつ団長のド・フォンタネ(Jean de Fontaney、洪若翰)だけである。ほかのメンバーは、タシャール(Guy Tachard、塔夏)を除いて、ブーヴェ、コント(Louis le Comte、李明)、ジェルベモン、ヴィストロー(Claude de Visdelou、劉心)は、皆大ルイ学院の学生だった。彼らは、のちに続々と来清してきたフランス系宣教師らとともに、康熙帝の親任を受け、側近にあつてユークリッド幾何学などを進講したり、また、康熙帝の命を受けたレジス(Jean Baptiste Régis、1663~1738、雷孝思)、張誠らは、中国全土の測量を行い、後に『皇輿全覽図』として刊行したように、十七後半から十八世紀の後半にかけて、様々な困難な条件下に置かれたものの、清代中国において、最も活躍し、最も多くの著訳書を残したのは、フランス人宣教師だったのである。張国剛『從中西初識到禮儀之爭・明清传教士与中西文化交流』(人民出版社、二〇〇三年十二月初版)、二二九~二二六頁、Benjamin A. Elman, *On their Own Terms: Science in China, 1550-1900* (Harvard University Press, 2005) pp. 169-182 など参照。

ちなみに、イエズス会ローマ古文書館所蔵のフランス系宣教師の漢文著訳書集は、目下編集中で、早ければ今夏台湾の光啓出版社から出版される予定である。

なお、イエズス会に比べれば数量的に極僅かではあるが、ドミニコ会（一六三二年來明）、フランシスコ会（一六三三年來明）およびアウグスティヌス会（一六八〇年來清）などの宣教師達の著訳活動にも一定の目配りが必要とすべきだろう。

3 漢訳西学書の分類について、明末李之藻に次いで、徐宗澤が『明清間耶穌會士譯著提要』（中華書局一九四九年版影印、中華書局、一九八九年一月第一版、二頁）において、次のように敷衍している。いわば、『西土遺留於吾人之書籍、大綱可分為宗教及科學兩類、其細目亦可分析言之。』宗教書中有論道理及講修成之書、有辨護、闡述、釋經、解惑之書、有聖人行實等、及聖教經文等書。科學書中、有天文、地輿、水學、哲理、小學、形下學等等。其著書之人雖盡為耶穌會士、而國籍則有意、比、德、法、葡、西、荷、奧、匈、波等國之不同至論時期則自萬曆帝起、以迄乾隆中、達二世紀、という。

ちなみに、当研究着想の当初より筆者の関心は、マテオ・リッチ以降のイエズス会宣教師による一連の著訳活動を、主として科学思想史の角度から検討しようとするにあったのである。それは部分的ではあるが、図らずも一部の既成研究の着眼と揆を一にしている。たとえば、最近公刊された安大玉の労作『明末西洋科学東伝史』（知泉書館、二〇〇七年八月）は、副標題に示されるように、もっぱら「学初書」の器編研究である。なお、研究構想の段階から「理編」にみえるカトリック神学思想、なかなか漢語、日本語などの、いわゆる漢字文化圏諸国の言語文化に置き換えられたその豊穡な思想性にも強い関心をもっているというのが実情である。近年、『徐家匯藏書樓明清天主教文獻』（全五冊、鐘鳴旦、杜鼎克、黄一農、祝平等編、台灣輔仁大學神學院發行、中華民國八十五年）、『明末清初天主教文獻叢編』（周顯方編校、北京圖書館出版社、二〇〇一年）、『耶穌會羅馬檔案館明清天主教文獻』（*Chinese Christian Texts from the Roman Archives of the Society of Jesus*）、（十二冊、鐘鳴旦、杜鼎克編、台北利氏學社、二〇〇一年）『清中前期西洋天主教在華活動檔案史料』（全四冊、中華書局、二〇〇三年）など関係する新しい史料が次々と公刊されるにつれて、中国内外で注目すべき研究成果が相次いで上梓されるようになった。当研究の展開と深化を図るために、近々学術交流を重ねて来た日中韓の関係研究者との共同研究は今準備中である。

4 朝鮮王朝実録のウェブサイト <http://silok.history.go.kr> がある。

5 山内弘一「朝鮮王朝の成立と両班支配体制」、武田幸男編『朝鮮史』（山川出版社、二〇〇〇年）所収、一六五―二二頁参照。

6 伍躍「朝貢関係と情報収集 朝鮮王朝对中国外交を考えるに際して」（夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』所収、京都大学学術出版

会、二〇〇七年三月）参照。当論文は、朝鮮王朝では、当時東アジアの国際秩序における宗属関係のなかに組み込まれながらも、いかに情報収集活動を通して、「独自の自主的な国家経営」を模索していたのか、という実態を一次資料に基づいて明らかにし、当該領域で大きな影響力をもつ「朝貢システム論」に一石を投じた意欲作である。

7 朝鮮儒学「朱子学の近世日本社会への影響について、阿部吉雄の名著『日本の朱子学と朝鮮』（東京大学出版会、一九六五／一九七五年）、および辛基秀、村上恒夫『儒者姜沆と日本 儒教を日本に伝えた朝鮮人』（明石書店、一九九一年）などに詳しい。

8 明清思想家の朱維鈺は晩明における王学と西学との関係について、次のように述べている。「若し晚明学術史の全貌を眺めようとするれば、ある歴史の現象に目が惹かれぬ人はいないだろう。すなわち、前述したマテオ・リッチの宣教師ルートは、恰も王学が萌芽発生から隆盛に到るまでの空間的軌跡とびつたりと重なっている、ということである。（中略）マテオ・リッチ入華の際、丁度王学の解禁に巡り合い、丁度『東海西心同理同』という理論が一世を風靡した時に当たり、ゆえに、かれが伝えた欧州の学説は、王学思潮が最も盛んな南昌の学者士人に西海より来た聖人前賢が発見した新しい道理として受けとめられたのは、それほど驚くことではなからう。」朱維鈺「導言」（朱維鈺編『利瑪竇中文著訳集』復旦大学出版社、二〇〇一年）。

9 そのあたりの経緯については、以下の文献に詳しい。『李朝実録仁祖実録』巻七、卷三十五、*McCooper, Rodrigues the Interpreter*（New York, 1974）（松本たま訳『通辞ロドリゲス：南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国、原書房、一九九一年）、姜在彦『西洋と朝鮮 その異文化格闘の歴史』（とくに第三章「鄭斗源とロドリゲス」、文芸春秋、一九九四年）、同氏「朝鮮の儒教と近代」、「朝鮮の開化思想」、「朝鮮の西学史」（それぞれ姜在彦著選第 一巻、第 二巻、第 三巻、明石書店、一九九六年）、山口正之「朝鮮キリスト教の文化史的研究 朝鮮西学史」（とくに第二編第一章「御茶ノ水書房、一九八五年再版発行」、金泰俊「虚学から実学へ・十八世紀朝鮮知識人洪大容の北京旅行」（東京大学出版会、一九八八年）、小川晴久「朝鮮実学と日本」（花伝社、一九九四年）および松浦章編著『明清時代中国與朝鮮的交流 朝鮮使節與漂着船』（台湾漢學書局、二〇〇二年）。

10 芝峰類説、李睟光著、全二〇巻一〇冊、一六四四年七月に編纂出版された百科全書的書物である。政治制度史と文化史において特記すべきものを選んで、そこに天文、地理、自然、動植物と外国の紹介を加えたものである。図 1、図 2 に示されるのは、「西学」「西器」が最初に朝鮮に導入されたときの記述部分である。



日中朝（韓）という狭義の東アジア三国における思想運動としての実学思潮は、まず明末清初期に中国で興り、ついで李朝後期の朝鮮、そして近世初期の日本社会において継起的に発生していたというのは、一般的な見解である。こうした東アジアの実学思潮についての研究蓄積が数多く存在している。たとえば、陳鼓應ほか編『明清実学思潮史』（上・下、齊魯書社、一九八九年）、葛榮晉主編『中日実学史研究』（中国社会科学出版社、一九九二年）、源了圓『近世初期実学思想の研究』（創文社、一九八〇年）、実学資料研究会編『実学史研究』（思文閣、一九八四年）、前掲千寛宇の先駆的研究「福澤 柳響遠研究」をはじめとする一連の研究は代表的なものとみてよからう。だが、李朝後期における実学と西学との関係をめぐって、精緻な研究を行なったのは、管見の限り李元淳『朝鮮西学史研究』、一志社、一九八六年（玉玉潔ほか訳、鄒振環校訂（復旦大学韓国研究叢書）『朝鮮西学史研究』、中国社会科学出版社、二〇〇一年）、とくにその第二編「朝鮮西学史の实学性」が挙げられよう。

ついでに触れるが、目下は活動停止状態となっているが、前世紀の八十年代中期から日中韓の関係研究者が「東アジア実学研究会」を立ち上げ、三ヶ国交替で三年毎に一回研究大会が行われていた。平成六年十月二十七日、二十九日、早稲田大学で行われた「第三回東アジア実学シンポジウム」に大会組織委員長の小川晴久教授に命じられ、筆者もスタッフの一員としてお手伝いし、実学研究の動向をつぶさるに了解する貴重な機会を得たのである。ところで、韓国思想界で常に先鋭な論鋒と強烈な個性で知られている金容沃氏は、近年、こうした実学研究を頭から否定している。氏に曰く、「朝鮮思想史において『実学』という流れが本当にあつたわけではない。『実学』という時代精神は歴史的現実として前提されていた『事実』としての『歴史の実体』ではなく、むしろ『後代に作られたフィクション』としての『概念』に過ぎない。実際では、意識的な運動としての『実学運動』も、それを主體的に担った『実学派』も存在しなかった。（中略）『実学』という歴史叙述概念は、『近代性』の構造をいかに規定するかによって変動する可変的、相対的な概念に過ぎない」（『朝鮮思想史における崔漢綺の位相への試論』『季刊日本思想史』、No.6、二〇〇四年二月号所収）としている。明快で刺激的な氏の論説自体も、やはり伝統的な思想に如何に「近代性」を見出すかという条件から出発した、やや史的裏づけの弱いものであるように思われる。

なお、李朝後期の西学運動について、既出のほかに、本稿で参照したのは、主として以下の数点である。崔韶子『東西文化交流史研究 明清時代西学受容』（三英社、一九八七年）、具萬玉『朝鮮後期科学思想史研究』（연세국학총서 40, 해안, 二〇〇四年）、朴星來『韓國近世의 西歐科學 受容』（『東方學志』第20集 延世大学校国學研究院、一九七八

年）、李光來『韓國近代期儒敎の知と西洋思想』（前掲『季刊日本思想史』No.6）、李漢燮『朝鮮における西学漢訳書の伝来について 奎章閣所蔵西学書を中心に』、『国際研究集会論文』（『近世東アジアの多様な方向性』、二〇〇七年六月二十九日、弘前大学）などである。

12 図三の作表は、それぞれ以下の文献によるものである。実学については、千寛宇「福澤 柳響遠研究」（『歴史研究』第2輯、3輯、一九五二年、李佑成「韓国における実学研究の現況と東アジアの連帯意識」（上）述東アジア実学シンポジウム論文）による。西学については、前掲李元淳著書中訳版（序文）六十一頁、前掲李漢燮論文などによる。

13 李元淳著書中訳版、一九九頁。

14 純正一年、西暦一八〇一年（干支は辛酉）に起きた天主教弾圧事件である。正祖の父思悼世子の死（一七六二）をめぐって起きた時派と辟派の競争が宗教弾圧に発展した形の流血事件である。同年二月二十二日、禁教令が發布され、四月、朝鮮最初の天主教徒、北京で洗礼を受けた李承薫（号は蔓川、教名はベテロ、*Vetelo*）、丁若鍾（丁若鏞の三兄）、崔必恭、洪榮敬、洪教万、崔昌顙らが処刑され、李漢の従孫、幾何原本を熟読し東国（朝鮮）幾何学の權威を自認する李家煥、権哲身らは獄死した。丁若鏞と彼の次兄の若銓は流刑に処された。さらに、六月には朝鮮に潜入した中国人神父周文諒が処刑された。こうした弾圧に対して、信徒の黄嗣永は、北京のグベア司教に帛に記した救援要請書を送るうとしたが捕らえられ、帛書も押収された。「黄嗣永帛書」は李朝に天主教を公認させる手段として、清の宗主権の行使と西洋艦隊の示威を求めていたので、李朝当局に深刻な危機感を抱かせた。その結果、弾圧は強化され殉教者は約百四十にも上った。さらに弾圧の対象は天主教関係だけでなく、西洋の科学・文化全般に及んだため、アヘン戦争（一八四〇）以降の東アジアの国際情勢の中で朝鮮はとり残され、近代化に遅れる一因となったとも考えられている。

15 山口正之前掲書、四頁。

16 正学としての朱子学を衛り、邪学、すなわち朱子学以外の儒学流派、仏道教、とくに西教としての天主教、西学などを斥けるという政治的・思想的運動である。十九世紀以降、李恒老を筆頭に、奇正鎮、金平黙、崔益鉉、柳重教、柳麟錫などは衛正斥邪論を唱え、さらにそれに基づいて、いわゆる斥邪上疏、義兵闘争といった運動が起こされていた。十九世紀後半、李朝末期の大院君の攘夷鎖国策もまさにそういう思想に支えられて行われたのである。

17 明清代個人書目は主として『中国歴代書目題跋叢書』（上海古籍出版社、二〇〇五年）、『清代目錄提要』（来新夏主編、齊魯社、一九九七年）、『江浙訪書記』（謝國楨、上海書店、二〇〇四年）など参照。書目における漢



訳西学書について、鐘鳴旦、杜鼎克「簡論明末清初耶穌會著作在中国的流傳」『士林』、1992年第2期、張國剛前掲書、三七〇～三七二頁参照。

18 「提要」収録の漢訳西学書について、以下の諸論考を参照すべし。計文徳『從四庫全書探求明清間輸入之西学』（台湾漢美圖書公司、一九九一年）、霍有光「從『四庫全書總目提要』看乾隆時期官方對西方科學技術的態度」（『自然弁証法通訊』、一九九七年第五期）、陳占山「四庫全書『載錄』教士撰譯著作述論」（『文獻』、一九九八年第一期）。吳亞媛は、『四庫全書總目』對西学的評價」（『康雍乾三帝与西学東漸』宗教文化出版社、二〇〇二年十二月、四五四～四八七頁）において、『提要』収録の凡ての西学書目に関する詳細な論考を行っている。なお、『提要』に対する包括的研究として、張伝峰『四庫全書總目學術思想研究』（学林出版社、二〇〇七年）に詳しい。

19 梁啓超の「明清間耶穌會士訳著提要」（『中国近三百年學術史』所収）は、基本的に稲葉君山の「明末清初支那滞在の耶穌會士及び著書一覽」（『清朝全史』（早稲田大学出版部蔵版、大正三年四月十八日発行）を下敷きとしている。後に、同氏の「西学書目表」は、それをベースに、更に十九世紀末以降の書目を加えて成ったものである。

20 明末清初期における漢訳西学書の総部数については、それぞれ前掲李元淳書六十二頁（中国語版四九～五十頁）、前掲B・Elman著書pp.110～112、徐宗澤書四七三～四七八頁、李蘭照『湯若望伝』（東方出版社、一九九五年）三十八頁など参照。

21 楊昭全『中国 朝鮮・韓国文化交流史』（崑崙出版社、二〇〇五年）一〇二〇～一〇二二頁。

22 前掲李元淳著書六十四頁、中国語版五十一～五十二頁。

23 同上、中国語訳版五十三頁。

（本稿は平成十九年度科学研究費補助金基盤研究C（課題番号17520065）及び国際學術振興基金平成十八年度（外国人研究者との共同研究、十九年度（學術の活性化推進事業）からの助成による研究成果の途上報告の一部である。）